

令和7年度 鳥取大学入学者選抜試験問題
一般選抜（後期日程）

小論文

（医学部 保健学科）

（注意）

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題は1ページ、解答用紙は1枚である。指示があってから確認すること。
3. 解答はすべて解答用紙の指定のところに記入すること。
4. 下書きをする場合は、問題冊子の余白を利用してよろしい。
5. 問題冊子は持ち帰ること。
6. 解答用紙は持ち帰ってはならない。
7. 解答用紙の上の欄に受験番号を記入すること。

令和7年度 鳥取大学医学部保健学科入学者選抜試験
一般選抜（後期日程）

問題 次の課題文を読んで後の問いに答えなさい。

科学が偶然性と無縁であるというわけではない。実は客観性や普遍性を謳う科学も偶然性と縁が深い。近代の学問は、一見するととりとめなくランダムに生じている偶然の出来事をどのように合理的に理解するのか、という観点から発展してきたとさえ言える。現代医学のスタンダードであるエビデンスにもとづいた医療と呼ばれる標準化をはじめとして、客観性と妥当性を重視する近現代の科学は統計学に依拠している。

（中略）

統計学は、たくさんのデータを集めて数学的な処理をすることで、出来事という本来偶然かつ個別的に生じるものから法則性を導き出す方法だ。これは学問の重要な成果だ。私たちの生活は、統計学によって偶然を統御することを抜きには成り立たない。一見すると無秩序な自然現象や社会現象のなかに法則性を見つけることで、例えば天気を予報したり、がんの予後や治療薬の効果、感染症の罹患率などの計算が可能になるのだ。統計学は偶然の出来事に正面から直面するのではなく、少し目をそらして外から眺めることで飼いならす。しかし、偶然との出会いから生まれる唯一無二の経験や説明を超えた変化を、統計学は考慮しない。

逆に言うと、統計学の発達は、私たちが日々直面する出来事とその経験が、意のままにはならない偶然に支配されているということを知らしめる。例えば、一生のあいだにがんになる確率は、男性で65%、女性で50%ほどだ。治療方法も治験を通して統計に基づいて効果が測られ、標準治療としてマニュアル化されている。

しかし、実際ががんになるということは、患者それぞれで意味は変わってくる。病とどのように出会うのかは人によって異なり、どのように受け止めるのか、病に対してどう応答してその後の生活を組み立てるのかは、本人の年齢や家族関係や社会関係によって大きく変わってくる。偶然の出来事に対しては、受け止める側の反応も個別的で多様なのだ。同じ診断名の病気であっても一人ひとりのストーリーは異なる。

出典：村上靖彦、『客観性の落とし穴』（ちくまプリマー新書 2023）p. 113～p. 115
より抜粋・一部改変。

問. 客観性と偶然性をどのように捉えるか、病という出来事を例に、あなたの考えを600字以内で述べなさい。